ウィリアム・ブレイクの『無垢の歌』
―その同時代性をめぐって―

神戸大学 安永 幸史
YASUNAGA Koji

ウィリアム・ブレイク（1757～1827）の『無垢の歌』(Songs of Innocence：1789）は、彩飾本とよばれる彼の一連の制作物の中でも最初期のものに当たる。先行研究においても、主に英米文学の立場から、そこに込められたとされるブレイクの思想をめぐって様々な意味解釈が提示されてきた。同時代との関係性に着目したものとしては、当時の児童書との類似の中でその道徳のあり方を問題化しつつブレイク独自の道徳を語ろうとしたものとする解釈がある（Shrimpton;1977）ものの、同時代との相互作用に対する制作上の意図に関する研究は未だ十分とは言い難い。本発表では、題扉の図像、及び『無垢の歌』の年紀にある 1789 年前後のブレイク周辺の出版状況に着目しながら、『無垢の歌』と同時代との相互作用に関するブレイクの意識について一つの解釈を提示したい。

まず、『無垢の歌』の題扉が、1779 年に出版されたジョージ・リチャードソンの『イコノロジー』(Iconology）に掲載されている「教育」を表す擬人像に酷似しているという事実に着目したい。ブレイクにおいては既存の図像の取り入れは、自己の神話大系に引きつけた上での意味の変成を被ることがしばしばあるが、この「教育」の擬人像に関しては 1788 年頃彫版の『自然宗教は存在しない』(There is No Natural Religion ： ca.1788）にほぼ同一の人物像が「教育」を表す目的で使用された例があり、年代的にも非常に近いことから「教育」を表すことはほぼ間違いないと判断できる。

一方、当時のブレイクの周辺を見ると、1780 年代、とりわけ 1788 年以降、仕事上関係の深かった出版者から 1780 年代において多くの教訓主義的な児童書が出版されていた。その中でもブレイクと面識のあったと考えられる著者の作品において、児童書の目的が子どもに教訓を与えるものとして語られていたことが確認できる。

以上を踏まえた上でブレイクの「教育」という語の使用例について見ていくと、先述の「自然宗教は存在しない」では、「教育」が「道徳適合目性を与えるもの」として語られている。この意味での「教育」は後年の記述、特に 1825 年の記述においてもほぼそのままの形で見られること、そもそも「教育」という語自体が周辺における道徳的教訓を与えるものとしての児童書というものとの相互関連性を示唆し得ることから、題扉における教育の擬人像は「道徳性付与」を定義として内包している可能性は高い。この「教育」は、「道徳的適合性」を与えるものとしての同時代の児童書のあり方を一つの焦点として問題化するという、『無垢の歌』と同時代との相互作用に関するブレイクの意図を示すものではないだろうか。